原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第13号

CO患者・境さんの現状

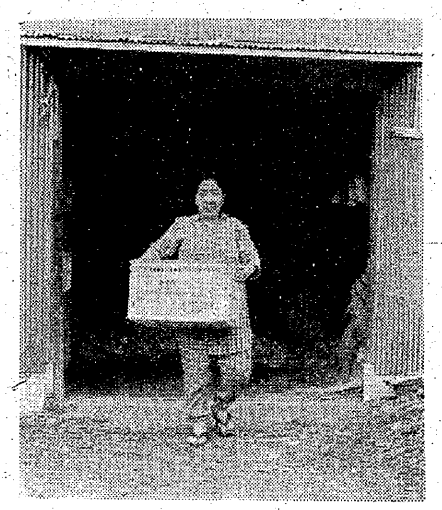
このまいかれては……

――せめて、以前の薬を飲ませたい

救心飲んで始まる一日

CO患者・境瑞喜さんの住まいは、三池山につらなる小高い山なみに抱かれた、大牟田市大字上内芝尾三千二百六十三番地。

その、小高い山なみの東のはしから太陽が顔をだすと、いままで真っ暗だった上内の芝尾に朝がおとずれる。



すつかりやせ衰えたCO患者の境さん。話す言葉も苦しそうで、コタツのなかに寝たり起きたり。妻のハツエさんの顔にも、疲れが。左は、農作業中のハツエさん。

始まる一日

境さんの家では――

境さんの妻のハツエさんがひと足早く起きだして、朝餉の仕度。準備がととのい、いざほかの家族が食卓につく七時頃、境さんはやっとの思いで寝床からぬけでるのである。

寝床からぬけでると、境さんはまず漢方薬の〝救心〟を二粒口に入れる。普通の人の場合一粒のところを、彼は二粒ずつ飲むことにしている。ここ数年間、あたかも彼の生命活動の欠くことのできない、一部分の営みでもあるかのように続けてきていること。

〝救心〟を飲んでから十五分の後、境さんは自分の体をやっと食卓の前におく。そして、長年の例で薄いおかゆを、それも一パイを三度三度。彼の一日は、こうして漢方薬の〝救心〟を飲むことからはじまるのである。

背負った宿命

いまから五年前、昭和四十三年七月一日、三池労組の団結の力でそれまでひき伸ばしていた定年のために、三池の三川鉱を退職。（ほんとうの定年は、その年の一月だった）

定年こそ過ぎたものの、まだ六十才という境さんなのに、妻のハナエさんはいう――「どうか見てください、このやせ方を。骨と皮ばかりです」。事実両眼は落ちくぼんでしまって、境さんの衰えは七十才を過ぎた老人を思わせずにはいない。

彼は大正二年一月五日生れ。三池炭鉱入社は昭和十年十月で、二十三才のとき。本所の建設課勤務だったが、三池闘争後の三十六年に三川鉱と転籍。仕繰工としてはじめて、坑内というところで働くようになった。それから二年後にはもう、あの大爆発で被災、CO患者という思いもよらぬ宿命を背負わされてしまったのである。

三井天領町病院の一室に、ぐったりとなってころがされていた境さんを、ハツエさんがさがし当てたのが、翌る日の昼過ぎのことだった。数日後、大牟田労災療養所の転院。境さんの、CO患者としての宿命の生き方がはじまる。

体力の衰え。頭痛。不意に襲ってくる心臓発作。それまでの二十八年間、雨が降ろうが矢が降ろうが、約七、八キロもあるガタガタ道を、自転車通勤で押し通したほどの彼の相貌とともに、家庭の暮らしは一変した。

その境さんも、昭和四十一年十月二十五日、「病状固定」を口実に、政府から労災補償を打ち切られ、その後有無をいわせず押しつけられた傷害認定は〝九級〟。わずか二十万円の手切れ金で、境さんは三井と政府からポイと放りだされてしまったのである。

頼るは漢方薬

現実は、CO中毒症がひどくなるばかり。三年ほど前から、恐ろしい心臓発作が頻発しはじめた。それも、夜なかに多い。

「突然のうめき声で起こされ、すぐ医者を呼びますけど、いくら注射うってもらっても少しも効かず、主人にこのままいかれてしまっては、買い薬どん飲ませて何ばしとったかと、そとに出ている子どもたちからは責められましょう。また、いいわけも立ちません。やっぱり打ち切り以前にもらえていた薬を、一日でもよいから飲ませてやりたい気持でいっぱいです。効いていましたから」と、ほとほと話すハツエさん。

しぜん頼り薬は漢方薬。高さ一センチ、幅一センチの小ビンの底に、粟粒のような薬が少しはいっている〝ゴオウ〟が二千円。〝救心〟が、先月まで二百八十粒入り四千五百円だったのに、いまは二百六十粒入りで五千円。衰弱に効くと聞いて買った朝鮮人じんエキス〝ヒヤク〟が、六十カプセルで二千八百円。それをハツエさんは「子どもたちが仕事からの帰りに黙って買ってきてくれます」という。

夜――八時か九時ごろ、境さんは、そのなかから〝救心〟をとって二粒口に入れ、寝床にはいる。ボサーッと、コタツの中にいるだけの彼の一日はこうして終わる。いや、終わらないときが多いのだ。なぜなら、彼は、骨と皮ばかりに衰えてしまった体で、その後襲いかかってくる心臓発作に、七転八倒して耐えなければならない夜が多いのだから。

宮島さんは仏の化身

荒尾四小守る会、CO患者見舞う

三日の日曜日のこと、荒尾四小校区CO守る会（会長は小里透さん）の人びと約二十人が、〝はたかぜ〟に乗って、熊大附属病院入院中のCO患者を見舞った。

ことに、その命があやぶまれている宮嶋重信さんのお見舞いと、過去十年も、不眠不休で介護を続けてきている富太郎さんとイシさんのご両親をはげましてあげよう、との心ぐみからだったが、同校区守る会の人びとはこんどの見舞から、果たして何を感じとったのだったか。

編集部ではとくにお願いして十二日の夜、見舞いに参加した十五人の人に集ってもらい交流を行ったところ、余りにも教えられるところが多く、真に頭のさがる思いだった。

余りにも尊かった体験

以下は、尊い体験や意見。

――私は、重信さんがあならない以前の姿を知っていましたから、顔が少しくらいやせているくらいに考えていったところが、余りの変りように気をのまれてしまって。昔はほんとによか青年でしたし、その昔の顔のままを胸におさめといて、見なければよかったなー、と思ったほどでした。

――頭の毛はもちろん、体毛は一本もなくつるつる。ああして十年を生きられたのは、私には神わざとしか思われません。今からこんなことはいえませんが、命が果てられたら仏として祀るべきだと思います。あれは仏さんの化身ですよ。

――ひどい息子の姿を、毎日見つづけて生きてこられたご両親に、何も申しあげる言葉はありませんでした。かりに自分の息子があんな姿になったとき、自分がどう思うか、涙も出ませんでした。

――私は宮嶋さんの入院室でほんとうの親子の姿を見ましたもし宮嶋さんが結婚なさっていたら、嫁さんがあそこまでめんどう見きれたかどうか。三年ももたんでしょう。十年間、ほんとによく介抱してきてくださいました、資本えの怒りがあったればこそ、できたことだと思います。

――宮嶋さんこそ、仏さまのお姿だとつくづく思いました。あの日三川鉱の坑底で息絶えていった、四百五十八人の人びとの魂が宮嶋さんの体に乗りうつり、そしてあの悲惨な姿を通して、三井資本の犯罪を告発し続けているのだと、私は心に深く感じとりました。そうでなくて「もうだめだ」と何回もいわれながら、十年もあの命が続いてきた道理がありません。そうではないでしょうか。

怒りを行動え

一つひとつの言葉が、メモするこちらの胸につきささり、いいようのない感動を呼び起こされたこの夜だった。

荒尾四小校区CO守る会は、会員ほぼ四十人。会員は労働者というより、電気請負業の小里会長をはじめ、衣料品店主、保険セールス、その他の自営業者といった人びとが多い。

ここの守る会は、荒尾の物価メーデーにも大挙参加したが、会員のだれに聞いても、「会の存在は、決して三池のCO患者や遺族のためにあるばかりでない。」という。

「倉掛通りを歩いて見てもらってもわかります。二、三年前の状態と、今のそれとを比べて見てください。私たちの力が、変えたんですよ。一人だけでは何もできず、弱いもんでも、こうして団結すれば力も出ます。まして公害や交通災害などが、異常に多発しているときだけに私は三井への怒りを行動にかえてやっているのです。ほかの地域でも、CO守る会がどんどん誕生すべきですね」

こういった人もいて、みんなの目は真剣だった。

明日を心配されながら、生き続けてきた宮島さんの枕元に、気をのまれて立ちつくす荒尾四小守る会の人びと。